パネル報告の記録

# ムスリム系移民・難民と東南アジアの民族間関係
## ミャンマー・マレーシア・バングラデシュの事例から

**日　時**：2017年6月4日（日）　**場　所**：広島大学東千田未来創生センター

**主　催**：東南アジア学会／JSPS科研費16H03317／京都大学東南アジア地域研究研究所「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」共同利用・共同研究拠点プロジェクト「災いへの対応としての非正規滞在者：東南アジアを事例として」

## 趣旨説明

**山本 博之**
京都大学

東南アジアでは、多民族的な構成をもつ住民を抱えて国民国家が形成され、国民的な統合や民族間の関係が課題の一つとなってきました。それらの多くの国では、独立から数十年を経て、民族間関係が国ごとに構築され、その秩序が国民によって一定程度受け入れられてきています。これに対し、域内・域外からの移民・難民の増加は、移民・難民をどこにどのように受け入れるかという実務上の対応と合わせて、各国に既存の民族間関係の見直しを迫る可能性も持っています。さらに、受け入れ国が送り出し国を批判することにより、内政不干渉を原則としてきたASEANの地域秩序にも変容を迫る可能性を持っています。

本パネルでは、近年「ロヒンギャ問題」として顕在化しているミャンマー・バングラデシュ国境地域からのムスリム系移民・難民の事例から、ミャンマー、マレーシア、バングラデシュの3か国を取り上げ、東南アジアの民族間関係のあり方について考えたいと思います。

ミャンマーは「ロヒンギャ」を自称するムスリム系移民・難民の「送り出し国」です。ただし、ミャンマー政府はこれらのムスリム系移民・難民がミャンマー国民であることを認めていません。「ロヒンギャ」の人々は自分たちがミャンマーの土着住民であると主張していますが、ミャンマー政府は彼らをひとくくりに英領時代あるいはそれ以降の移民としているためです。さらに最近の反ムスリム運動によって、「ロヒンギャ」のみならずムスリムのミャンマー国民は国籍をはく奪されるのではないかという危惧を抱えています。「ロヒンギャ問題」の国際化はミャンマーの民族間関係にどのような影響を及ぼしうるのでしょうか。

マレーシアはロヒンギャの受け入れ国の一つです。マレーシアでは、移民・難民がマレーシアにおいて相当程度の独自のネットワークを持っており、また、政府・市民社会がロヒンギャへの対応を余儀なくされる程度に移民・難民問題が社会的に可視化され認知されています。国内の多数派がマレー人ムスリムであり、主に英領時代の移民である中国系やインド系を国民として受け入れてきたマレーシアが作り上げてきた民族間関係は、ロヒンギャの受け入れに有効に働くのでしょうか。それともロヒンギャをはじめとするムスリム系移民・難民はマレーシアの民族間関係を作り変えるように働くのでしょうか。

バングラデシュでは、ムスリム系移民・難民が「ロヒンギャ」として国際的な関心を集めたことによって国内の民族間の緊張が高まっています。バングラデシュはミャンマーと国境を接し、歴史的にムスリム系住民の国境を越えた移動が見られますが、近年ムスリム系移民・難民が「ロヒンギャ問題」という形で国際化したことを一つの背景として、国境地域で軍事衝突が起こるに至っています。

これら3つの報告ならびにミャンマー／ビルマ研究および移民研究の立場からのコメントを受けて、フロアを交えた議論を通じて、東南アジアの民族間関係について、その今後のあり方も含めて考えてみたいと思います。